

政策についての基礎知識をもたぬものでも、資料集が十分に理解できるように編集されていることが、資料集の大きな特色である。

この資料集で明らかにされた主なことは、第一に、一九三三年熱河作戦と同時に開始された内蒙工作は阿片と深く結びついて推進され、三七年に関東軍により樹立された蒙疆政権は「第二満州国化」された傀儡政権であり、阿片は政権の最重要財源の一つとして統制がはかられたこと、第二に、蒙疆政権の阿片政策は、一九三七・三八年の旧制を踏襲したことから、三九年に土薬公司を設立して土商を介さずに阿片売買を独占し統制管理の強化と阿片の増産を目指すものになるが、取納実績が不十分で、四〇年には公司を解散し、土商の利潤を認容して自らはそれに寄生して利益の上前をはねる間接的統制方式にかわり、一応の成功を得たこと、第三に、この結果、蒙疆政権は、

一九三九年から四一年にかけて阿片取納を大幅に増加させるが、四二年には前年のわずか三五％という状況で、阿片の生産はまだまだいちじるしく不安定であったこと、第四に、蒙疆政権の阿片販売は、上海五五・四％、華北各地二四・三％と管外が九六・四

％で、管内での消費はごく一部であったこと等である。

残念ながら、この資料集には蒙疆から中国各地に配給された阿片が各地でどのように処理されたかを示す一次資料は含まれていない。しかし資料集の行間からは、日本は中国各地を占領後に阿片を禁圧しようとしたというより、蒙疆を阿片の供給源泉地としてむしろ積極的に阿片政策を組織的・系統的に展開したのであることが、一次資料の迫力で生々しく伝わってくる。

(A5版 六三五頁 一九八五年七月
岩波書店・七五〇〇円)

(伊藤之雄 京都大学研修員)

ゲオルク・G・イッガース著

中村幹雄・末川清
鈴木利章・谷口健治訳

『ヨーロッパ歴史学の新潮流』

本書は、欧米における近年の歴史学の動向を概観したものである。対象となつてゐるのは、フランス、西ドイツ、イギリス、アメリカの学界であり、さらにポーランドも視野におさめられている。本書の構成を

示しておこう。

第一章 伝統的歴史学の危機

第二章 フランスにおける『アナル』の伝統

第三章 歴史主義から「歴史的社會科

学」へ
第四章 マルクス主義と近代社會史

第五章 最近のアメリカ社會史の傾向

附章 エビローグ

このうち、第四章の一部と第五章はそれぞれ他の筆者の寄稿であり、その意味では、本書は厳密には三人の共著ということになる。

欧米での最近の研究動向については、社會史への関心の高まりから、わが国でもとくにアナール学派を筆頭にすでに多くの紹介がある。しかし、そうした動向紹介は個別に行われるのが常で、全体を俯瞰する視角に乏しかった。右の構成にも見られるように、これほど広範囲の対象を一望のもとにおさめたことが、本書の長所としてまず挙げられる。

だが、だからといって本書は、各国の研究者の動静に細大もらさず目配りした、単なる研究動向ハンドブックなのでは決して

ない。近年の歴史研究の量的膨脹を考えると、こうした研究は、著者の側での一定の明確な歴史学観なしに書かれるものではない。まして諸潮流の併存のなかに、歴史研究的発展の方向をさしめず一定の傾向を見出そうとする著者の意図（たとえば三四九頁）からすれば、一層そうである。

とすれば、「附章 エピローグ」は、その表題自身の与える印象よりずっと重い意味を本書のなかでもついていると言えよう。この章は、原著改訂版が出されたおりに、初版以後約十年の各国の歴史研究の動向をまとめ、補論として付け加えられたものである。したがって、その圧縮された概観には、著者の歴史学観がより明確に窺えるのである。

著者がここで強調しているのは、「象徴主義的歴史学」（三一七頁）の潮流である。ここに先立つ第二章から第五章で明らかにされているように、事件史的方法と政治史・外交史への傾斜を特徴とする伝統的歴史学への批判として立ち現われた現代歴史学は、その視線を過去の社会全体、あるいはそれを構成する民衆に向けてきた。そしてそのことは、分析手法の面では、解釈学的

考察から数量史的方法への推移に反映されている。こうした社会史的な視野の拡大という大きなうねりは、今日までの歴史学の底流となつてはいるが、しかし近年そこで新たな展開方向が顕著となつてはいる。すなわち、数量史が過去の民衆生活の物質的側面の解明に関心を払つたのに対し、近年の社会史研究はむしろ民衆生活の内実をなす象徴・文化・記号などに焦点をあわせるようになった。換言すれば、「人口学的、物質的な要素から、文化的・イデオロギー的要素への移行」（三二二頁）が起こつたのである。これに並行して、人類学の方法を援用した解釈学的手法が再び採用されるようになった。

こうした新傾向の先頭を切っているのが、フランスのアナール学派であり、その業績はわが国にも多く紹介されている。そのかぎりでは、著者のこの見方は別段唐突に響くものではない。ただ、それが歴史学の今後進むべき方向までも示しているのかどうか——もともと著者は、この点に関しては方法的多元主義を掲げることによって、明言を避けているのだが——については、大いに議論のわかれるところである。

しかし、いずれにせよ、現代歴史学の多様な潮流を一箇の全体像に集約しようとした意図は、十分に評価されるべきである。有意義な本書の刊行を喜びたい。

（A5版 三六二頁 晃洋書房 一九八六年一月 三九〇〇円）
（竹中孝 東海大学文学部講師）

受贈図書

- （一九八六年三月一日）四月一七日）
M・クラウル著・望田等訳 ドイツ・ギムナジウム二〇〇年史（ミネルヴァ書房）
金田章裕著 条里と村落の歴史地理学研究（文明堂）



- 立正西洋史（立正大学西洋史研究室） 八
- 京都部落史研究所紀要 五
- 総合研究所報（福岡大学） 八七
- 紀州（経済史）文化史研究所紀要 五
- 日本学士院紀要 四〇—三
- 日本学士院紀要 四一—一
- 神道学（神道学会） 一二八
- 人文学部紀要（札幌学院大学） 三八
- 八幡大学論集（八幡大学法経学会） 三六
- 二—三
- 札幌大学教養部紀要 二七